

「傀儡」「汪偽」と呼ばれ続けてきた汪兆銘政権を 歴史のなかに位置づける土台となる資料

汪兆銘政権に関わる人物たちが一覧的に参照できる、現代日中関係史研究において有用な一冊

新庄孝幸



汪兆銘といえは、孫文の三民主義と国民革命の思想に共鳴した高弟であり、中国国民党を代表する政治家、理論家の一人であった。しかし、抗日戦争をすすめる蒋介石に反対して袂を分かち、日本との和平を進めようとして南京国民政府の首班となった。彼は日本に留学した知日派であり、日本との対等な関係を求めて提携をはかりながら、日中戦争の泥沼化と激化する日本の中国侵略のなかで失意のうちに世を去った。そうして長らく、敵の日本と通じた「傀儡」「汪偽」という代名詞とともに語られ続けてきた。売国奴、悪党というのがこれまでの汪兆銘評価だった。

本書は、米国立公文書館IIに収められた、戦時中の一九四四年にOSS (米諜報機関) が作成した「汪兆銘政権人名録」を復刻した書である。OSSは日本のラジオ放送を傍受し、その記録と公刊物から、汪兆銘に関係する人物を網羅しようとした。その英文の人名録が本書の底本である。編集・解題者の三輪宗弘氏は、主要な人物の中国語簡体字表記、漢字日本語表記、そして英語での二通り表記(ウェード式ローマ字表記とピンイン)の対照表を作成し、日本語と英語で解説を付した。謎に包まれた汪兆銘政権に関わる人物たちが一覧的に参照できる、現代日中関係史研究においてきわめて資料的価値の高い有用な一冊である。

この「汪兆銘政権人名録」の原タイトルは BIOGRAPHIES OF PUPPET CHINA である。汪兆銘政権が PUPPET CHINA として表現されている。米国にとってもこの政権が傀儡と捉えられていたことがよくわかる。三輪氏は解題で、中国人がみずからの意志によって日本と和平を結ぼうとしたがゆえに、「汪偽」と断罪されてきた一方で、アメリカの財政援助を受けてきた蒋介石の国民党政権が傀儡と呼ばれないのはなぜか、さらに蒋介石は抗日戦争に勝利したにもかかわらず、中国の統一に失敗して大陸から台湾に逃げなければいけなかったのか、と疑義を呈している。汪兆銘に対する断罪の二因は、こうした問題にも伏在していることがわかる。つまり、国民党内で抗日と和平をめぐって蒋介石と汪兆銘の対立が抜き差しならないものとなり、汪が反蔣の動きを強める一方で、ハノイに脱出したあとに暗殺未遂事件が発生した。「傀儡」「汪偽」「敗北主義者」「偽政権」といった貶しのレッテルが「貼られ過ぎた」(本書)背景には、対日関係や国共関係だけにどまらず、国民党内の關係が影を落としていたのだから。

汪兆銘は共産党に対して批判的であり、蒋介石の容共政策をめぐってこそ対立を深めた。解題によれば、英国国立公文書館に残されている汪兆銘関係資料のなかには、汪を反共主義者と捉えた資料が残されているという。米国の資料が傀儡と捉えていることを鑑みれば、共産党および日本と彼らとの関係の違いが、「汪偽」などの評価に影響していることが、いっそう明瞭になる。

共和制を志向した孫文の影響を受け、フランスの政治思想を詳しく、海外事情にも通

じていた政治家である汪兆銘は、当代指折りの知識人であった。だが、一方で汪は、権謀術数にたけ、軍事力や諜報力を駆使する政治家ではなかったのではないだろうか。共産党を厳しく批判し、蒋介石と袂を分かっていた彼には、日本軍よりの他に頼る勢力はなくなつたというのが事実経過であつたと思われる。そして彼が頼った日本軍は、和平を求める汪をまさしく利用し、中国侵略をはかる軍事力に他ならなかつた。これが「汪偽」の内実であろう。

興味深いのは、三輪氏が示唆する、汪兆銘と日本側との交渉記録から浮かび上がる、日本側の妥協の可能性である。すなわち、蒋介石には妥協できないとしても、汪兆銘ならばどこまで妥協できると考えたのか、そして実際に妥協したのか。その問題を考えるうえで焦点となるのは、満洲の帰属問題、満洲からの日本軍の撤兵問題であつたという。日本は満蒙を「生命線」と位置づけてきた。だが、中国にとっては満洲こそが傀儡である。政治決着できるような容易しい問題ではなかつたであろう。それでも汪兆銘は、中国の固有領土である満洲という前提と、日本の立場とを踏まえ、「その渦中の栗を拾うが如く」解決の道を模索したのだと三輪氏はいう。

この点への理解が、日中間の歴史認識を考えるうえで示唆に富むという指摘はまことに興味深い。それが今日に至るまで歴史の教材であり続けているという意味は、本書によって明らかであろう。本書がひろくのは、「傀儡」「汪偽」「敗北主義者」「偽政権」といった既成の評価の枠に囚われない、新たな視点による日中関係史研究である。そうした研究が進展し、汪兆銘政権が歴史のなかに正真正正に位置づけられてはじめて、より多角的な見方が可能となり、日中の相互理解が深まる。本書はそのための土台となる資料なのである。

(ノンフィクションライター)